優秀賞

評価は誰のために

滋賀県　川辺　純子

国語の教員になったばかりの頃、私は提出物に厳格な基準を設けていた。例えば空白なしでA、空白が三個未満でB、それ以上あるとCといった具合だ。でも中には英語の意味も調べたり、漢字の成り立ちを書き加えたりする子もいる。そんな「想定外」を褒めてあげたくて「AA（ダブルエー）」という評価を作った。するとその響きの良さからか、期待以上の取り組みをしてくれる生徒が増えてきた。なかなか良い評価方法だと、私は悦に入っていたのだった。

「ハチドリの秘密」という単元に取り組んでいたときのこと、Uくんがすごいプリントを提出してきた。動物が好きなUくんはハチドリの絵と共に、その生態や分布を調べてプリント裏にぎっしりと書いてきたのだった。勉強はあまり好きではなかったUくんのこの取り組みに、私は大きく「AA」と書こうとした。が、一つだけ空欄があることに気づいた。評価基準は変えられない。仕方なく小さく「B」と書いた。

プリントを返却する日。自信満々で「俺、今回は絶対AAだから。」というUくんに、そのプリントを返した。その時、私は初めて見た。人間の目から涙が飛び出してくるところを。そう、驚きと悲しみが一緒にやってくると、本当に涙は目から飛び出してしまうのだ。それきりUくんは机に突っ伏してしまった。プリントが、彼の肘の下でくしゃっと曲がっていた。私はその時、教員の評価を子どもたちがいかに真摯に受け止めてくれているかを知った。そして教員の評価が生徒の学習意欲を削ぐものであってはならないと、強く思った。

Uくんは現在、若き税理士として活躍してくれている。しかし私は今でも、生徒のプリントを評価する度、Uくんの黒々としたプリント裏と、彼の目から飛び出した涙と、くしゃっと折れたプリントを思い出す。そして、評価とは誰のものか、私は生徒の学習意欲を削いではいないだろうかと心を引き締めるのだ。